

〔論文〕

キリスト教教育の特性

——よい人になってください——

葛 井 義 憲

名古屋学院大学法学部

要 旨

明治を迎えた日本が取り組んだ大きな事柄の一つに教育を全国民に行き渡らせることであった。すぐれた近代国家の建設は明日を担う子どもたちの成長発達にもかかっていた。実用的、科学的、合理的な生き方を「修得」させたかった。そして競争に「打ち勝ち」、「立身出世」を望ませ、「実利」を得ることを優先する生き方を求めさせようとした。

かかる近代化路線のもとで、キリストに倣って人生を刻む者たちは斬新な提示実践を表すが、なかなか周りから容認され難い「生き方」を示した。なぜなら、イエスをキリストとする者たちはイエスの地上の周縁に向けるまなざし、ひび割れた事態やそこにある人々に支援の手を差し伸べ、愛と癒しをもって寄り添うおうとする活動、そして創造主の導きに心を開いて従い、恵みに感謝しつつ生きようとするあり方。また、地上にあって創造主と結びつき、創造主の呼びかけに全心身を傾けていく生き方。そこには、誠実と勤勉と謙遜と感謝はある。しかし、近代化路線のもとで「世界の一等国」を目指して走る「軌跡」にのらない歩みを見せることもあるからである。

本稿では、子ども、周縁に関心を示し、「よい人」になることを勧め続けた内村鑑三、羽仁もと子・吉一、井口喜源治たちの言行を用いつつ、彼らがこの社会に投げかけた斬新さ、また、周りとの軋轢、彼らに対する排斥などをもおさえながら、彼らの言葉活動の意義を分析考察する。

キーワード：子ども、都市新中間層、周縁、よい人

Please Become a Better Person to Represent the Characteristic of Christian Education

Yoshinori FUJII

Faculty of Law
Nagoya Gakuin University

発行日 2016年7月31日

一 光は暗闇の中で輝いている

作家灰谷健次郎が収集した詩のなかに8歳の坊やの父や家族に寄せる敬愛が温かく、素直に綴られているものがある。タイトルは「おとうちゃん」。その詩をあげる。

うちのおとうちゃんは まっくろなふくやずぼんきとうけど ばかにするな。 おとうちゃんがおれへんかったら こうば うごけへんぞ。 くろいふくやずぼんきとうけど きゅうりょうはたかいぞ。 みんなばかにしやがると しょうちせえへんぞ。 ひらしゃいんとおもたらおおまちがいやぞ。 おとうちゃんはくろいかおしとうから みんなこわいとおもうやろうけど あんがいこわいことないぞ。 みんなのおとうちゃんよりやさしいぞ。
(灰谷健次郎著『灰谷健次郎の発言〈5〉』岩波書店、1999年、157-8頁)。

8歳の坊やは、お父ちゃんが、家族の喜ぶ顔や同僚の励む姿に触れようとして、一所懸命に働いていることをしっかりと捉えている。子どもたちは誠実に生き、他の人の幸福のために懸命に生きる人々の姿にうたれる。それは、彼らが、ものごとを鋭く、確実に捉える目と他者に素直に心を寄せる力を有していることを表している。別言すれば、人が「利己的生き方、打算、損得」などを計算して歩む前の、あまり曇らず、他者の喜びや悲しみにおのずと心を寄せる気持ちを子どもたちは確かに備えていることを示している。もう少し補足すれば、周囲から沢山の愛を受けて育ちゆく子どもたちはおのずと他者に心を寄せる気持ちを強く有すようになる。

このように、他から注がれる愛は人間が育ちゆく上で大事なものであることを認識し、考察した者たちの中に旧約聖書の民たちがいた。彼らの歴史は愛とは縁遠い迫害と差別と放浪に彩られ、常に死と隣り合わせの日々を生きねばならない事態のもとに置かれていた。けれども、「信頼と共存と喜びの内に生きる」という言葉が馴染みがたい歴史を歩む彼らは辛苦と悲惨と絶望の下で、自らをこの地上に送った創造主の愛と導きと恵みを実感していた。そしてそれらを生きる力、前進の糧として歩み続けた。この旧約聖書の民たち、つまり、ユダヤ人たちは彼らの歴史に刻まれた悲哀と慟哭を身に帯び、しかも、創造主の無私の愛(kenōsis)を体得させられていた。そうした歴史に連なるイエスは次の言葉を発する。

あなたがたがわたし〔神〕を選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ、あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るように。(中略) 互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。(ヨハネによる福音書 15: 16-7)

悲哀と辛苦の日々に知らされる神の導きと愛は地上にある名誉や財力や能力などに関わりなく、一方的に、創造主から人々に与えられるものだということに気づかされた¹⁾。

そしてこうした歴史的特質を心身に刻むイエスは迫害され、差別され、周縁へと追いやられた存在や「薄幸の状況」へおのずと身を寄せる。また、「光は暗闇の中で輝いている。」という言葉

をもって地上を歩んだ。イエス、そしてその弟子たちはこの地上を共に歩む、とりわけ「小さな他の存在」に眼をそそぎ、彼らに近寄り、創造主から施された愛、ケノーシスを分かち合おうとする²⁾。(B. P. Holt, *Thirsty for God* (Minneapolis: Fortress Press, 2005), 40-1.)。

二 教育、「肉的身体」、「霊的団結」、言葉

誰が必要とされる。誰かが尊ばれる。こうした世界はどうしたらできるのだろうか。現代文明もまた沢山のいのちを粗末にする。自分以外の存在を自らと等しく大事な、尊い存在だということを無視し、その生きる意義を黙殺しようとしている。しかし、あの8歳の坊やのように、懸命に生き、利害得失を度外視して他の人に心を寄せる存在に拍手を送り、支援したいとの思いも、人間は備えている。

こうした豊かな心を醸成する環境とその形成の意義を真剣に考え続けた人物たちは近代日本にも存在した。それは本稿で取りあげる、キリスト教をもって人生を歩み、自分たちが暮らす社会の進展とそこに生きる人たちの人格教育に勤しんだ内村鑑三、羽仁もと子・吉一、井口喜源治たちである。

近代を迎えた日本の変革と発展に大きく寄与したものの一つに教育がある。鎖国を解いた明治は教育の充実と進展、教育を行う施設の整備と拡張、そして教育が近代日本の成長・発展にいかん大事であるかを人々に知らしめる時代でもあった。

明治という元号がついてまもない明治5(1872)年8月には、はやくも近代学校制度の礎となる「学制」が發布された。これは教育の機会を子どもたちすべてに等しく与えることを目指すものであった。そして同じ年の2月、啓蒙思想家、福沢諭吉が『学問のすゝめ』初編を発行している。その冒頭の文章は人口に膾炙される「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり」(『福沢諭吉選集』第三巻岩波書店、1980年、57頁)という表現をもって書き出されている。さらに、この文章はそれまで人々を縛り続けた「身分制度」を打破する主張とその具現化をも全国に提示した。しかして次のような文章をも綴っている。「人は生まれながらにして貴賤貧富の別なし。唯学問を勤て物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり」(同書、57-8頁)と。「貴賤貧富」の原因は「身分制度」でなく、「学問の有無」にあるのだと、福沢は「学制」が發布される半年前に語りかけたのである。

けれども、この斬新で、社会に衝撃をもたらす「提案」が全国の親たちを即座に納得・了解・受容させるだけの素地を文明開化へと向かう日本には備わっていなかった。なぜなら、小学校へ上がることを勧められる子どもたちもまた家の用事、家での仕事を手伝う「働き人」だった。農民の子たちは親を手伝って野良仕事をし、女の子はその他に家事を手伝い、家事を身につけ、弟や妹の世話をする。職人の子は職人の親のもとで下働きをするか、また、他の職人のもとに弟子入りして、職人を目指す。さらに、ある子たちは商店へ丁稚奉公して、商売を覚える。

しかし、この「学制」の実施は家で育つ子どもたちの生活をそれまでと大きく変えていくことになる。さらに、これらの子どもたちを包含する家族や地域にも、それまで当然と見なしてきた

子どもたちに対する見方、捉え方、関わり方などに大きな変化がもたらされる。

それまでも、「学ぶ」ことの大事さは社会一般も認識していた。武士の子たちは藩校・漢学塾、寺小屋などで学び、生活にゆとりがある庶民の子たちも寺小屋での学びを明治を迎える前にもっていた。しかし、その学びは大きくなってつく仕事や日々の生活を円滑快適にこなしていくためのものであった。それ故、日々の「学び」とその展開は親から独立、自立し、「身分制度」を超えて、子どもたちが求める新しい職業を切り開く力、術となるとはとらえ難かった。さらに、親たちも子どもたちの才能やその開化、発達、将来、子どもたちが社会において輝かしく活躍する道を開き、用意することに繋がっていくとは考えにくかった。しかし、文明開化の明治は、教育が子どもの成長・発達を促し、社会での活躍の機会、「立身出世」の道筋を設け、国家に有用で、国家の「発展」に寄与する人間となることを求める時代であった³⁾。

「学制」発布後、小学校入学が次第に当たり前の光景となりだすと、子どもの周りの風景、家や地域の風景が変わっていった。それまで、親の仕事を手伝い、妹や弟をおぶって神社などで遊んでいた子どもたちが、少しずつ小学校で一日を過ごし、小学校が設ける学校時間によって、一日が左右されるのが当たり前の風景となっていた。また、子どもたちの一年の生活は小学校の「学校暦」に従って進められ、大人たちも、次第に、学校は子どもたちの将来にとって有用な所だと実感させられ、家も地域もこの「学校暦」を重視して日程、行事、寄合をこなしていった。「学制」発布後、次第に子どもたちの生活のスタイルは変わりだし、子どもたちも進出していく社会の動向に関心を高め、家も地域も学校の「暦」を優先して、回り出していった。

しかも、子どもたちの教育、子どもたちの成長・発達、「立身出世」への「期待」は彼らを抱える家・地域のあり方にもおのずと関心をもたせていった。そしてここで取り上げる内村鑑三、羽仁もと子・吉一、井口喜源治たちはかかる気運の下で「教育と家庭・社会」の改良を推進する理論リーダー、推進者となっていった。

彼らが「教育・家庭・社会」などの改良に積極的に発言し、実践して行くのは20世紀を迎えるころからである。この頃、日本の都市、東京、名古屋、大阪などには、夫と妻と子どもたちが暮す核家族生活者が増加しだした。地方から、上級学校への進学や、また、就職のために都市に出て、そこに留まって結婚し、家庭を形成し、子どもたちを得、大黒柱である夫の俸給で生活する都市新中間層と呼ばれる層が目立ちだした。彼らは自分の子どもたちの教育に大きな関心を払い出した。さらに、居住する国家が一層「強大、拡張」し、「世界の中で一等国」となることを求め、人々は「欧米化した生活」を実現させたいと望みだした。

そうした気運の下で、内村は1903(明治36)年に「家庭の建設」というエッセイを出した。また、同年、羽仁もと子、夫吉一は「家庭」形成、子どもの養育・教育に主眼を置いた『家庭之友』(1903年4月3日創刊)を発行した。

内村はその「家庭の建設」(1903年4月～6月)を彼が主筆である『聖書之研究』に掲げた。彼はその(1)で、次のようなことを述べている。

世間一般に「我が家」と云へば、我の寝る所、我の食ふ所、即ち宿賃を払はずして寝食の

出来る旅店であるかのやうに思はれて居ます。又「我の家族」と云へば我が娶りし妻と我が生みし子を称ふものゝやうに思はれて居ます、爾うして若し西洋に幸福なる家庭の有るのを耳にしますれば、是れ此家屋の華麗にして、此家族の安楽なるものであるやうに思はれて居ます、然しながら是れ家庭の何たる乎を判らないより起こる想像であります。(中略) 家庭とは勿論家屋のことではありません、勿論家庭を作るには家屋は必要であります、然しながら家屋があればそれで家庭が出来たとは言はれません、家屋は物でありまして家庭は精神であります、此事を知る事が家庭を作る上に最も必要であります。(中略) 家庭とは神より愛を受けた者が其愛を相互に交換する所であります(『聖書之研究』第三十八号聖書研究社、1903年4月、46-8頁)。

内村は「形」と「精神」をもって「家屋」と「家庭」の相違を捉えようとしている。彼は血の繋がりを基にした「血縁関係」「肉的身体」から別離し、「神の愛」「神の霊」が具体的に表される「霊的団結」「霊的身体」に大きな関心を示し、明治の日本に「神の愛、神の霊が横溢する家庭の意義」を知らしめ、そうした「家庭形成」が近代化していく日本に急務であることを痛切に感じていた。そこには、母・弟妹との実際の関わりも影を落としていたことも事実である⁴⁾。

彼はそれまでこの社会で容認されてきた「親・子関係」「抑圧と従順」が当然の如く求められ、強いられる「血縁関係」「肉的身体」に苦悩させられてきた。内村家の長男であるが故に、父母に孝養をつくし、弟妹たちを庇護する役目は当たり前のことであると迫られていた。しかし、創造主よりいのちを与えられた人間すべては、この地上で使命と役割を果たすことを望まれて誕生した者たちである。これらの子どもたちすべては、「肉的身体」のもとで繋がる親の権威や抑圧から「独立」し、「自由」が得られるのだろうか。子どもたちの「自発性」は育つのだろうか。また、地上をとともに生きる他の存在を理解し、「共存」し、助け合って明日の世の建設に希望をもって携われるのだろうか。

内村は、復活のイエスとの交わりの中で、いのちの創造主との繋がりを知らされ、その存在の赦しと愛と導きを味わいながら、自らに示された使命と役割に生きる大事さに気づかされていた。それは両親、弟妹に対する義務を超えて、万物の創造主との結びつき、また、そこから示される使命・役割に生きることを重視することであった。こうした内村の思念の一端は1894年7月、箱根芦の湖畔で開催された第6回夏期学校(基督教青年会主催)の講演でも表されている。この講演は後に『後世への最大遺物』(便利堂)とのタイトルで発行(1897年)され、多くの人々に知られていった。

私の心に清い慾が一つある。私に五十年の命を呉れた此美しい地球、此美しい国、此美しい社会、此我々を育てゝ呉れた山、河、是に私が何も遺さずに往つて仕舞ふのであるかと云ふ考です。(中略) 私は茲に一の何かを遺して往きたい。(中略) 唯々私が地球を愛し、私はドレ丈此世界を愛し、ドル丈同胞を思つたかと云ふ紀念物を置いて往きたい(『内村鑑三全集』4岩波書店、1981年、254頁)。

内村は地球・自然・人類・日本への愛とその発展や平和に少しでも寄与したいとの望みを語っている。そしてそれから9年後、内村はさらに語る。「言ふ迄もなく人は何人も人の属^{もの}ではありません、人は何人も直接に神の属であります（中略）其尊敬がありて始めて家庭も国家も神聖なるものとなるのであります」（『聖書之研究』第四十一号聖書研究社、1903年6月、47-8頁）と。

「神より愛を受けた者」、「神としっかり結びついた者」たちが相互にその愛を「交換」しあい、お互いを尊び合い、お互いの存在を認め合い、高め合う所で、信頼、希望、連帯、前進などの気運が醸成される。また、創造主を見上げ、創造主としっかりと結びつこうとの望みも生じてくる。さらに、この気運は「近代化」を推進するこの日本にとって、すこぶる重要なものである。なぜなら、そのもとで生まれるであろう「家庭」は近代日本が世界の平和・幸福を思索実践する上で必要とされる人材育成の場となっていくからである。

孝養と庇護に翻弄され、「抑圧と義務」は当然だとする「人的肉体」の向こうにある「霊的肉体」は創造主の愛と導きの下で、「我以外の存在」の生きる意義と重要性があることを知らせ、その「存在」と共に生き、助け合うことが、いのちと使命を与えられた者たちにとって重大であることを気づかせるとともに、このいのちを与えられた「私」もかけがえのない存在であることを実感させる。

創造主を中心に、一つひとつのいのちが固く結びあう構図をもつ「霊的肉体」「霊的団結」はそれまでとは異なる新たな「親子関係」「人間関係」を具体的に展望させた（拙著「天国、家庭、女性たち」（堀孝彦他編『内村鑑三』と出合って』所収）勁草書房、1996年、88-92頁）。

内村が「霊的団結」の家庭像を考究しだすのは20世紀を迎える前に既にあったと見なしてよいだろう。彼は1891年1月、第一高等中学校で生じた「不敬事件」で勤務する同校を追われ、同年4月には、病気の鑑三を看病し続けた妻加寿子を亡くした。鑑三と加寿子との結婚生活は1年9ヶ月弱であった。彼は失意と窮乏に苛まれた。

その彼が岡田静子と結婚したのは1892年12月である。愛知県岡崎出身の京都地方裁判所判事、岡田透の娘である。鑑三・静子の長男内村祐之の妻美代子は彼らの新婚生活の一断面を次のように記している。

もの静かな古都の、暖い家庭に育った身で、関東武士の血をゆたかに受けた烈しい気性の夫に仕え、夫の父母弟妹にまで仕送りをする窮乏の生活をやりくりするのは、並たいていのことではなかったにちがいない。しかし母が持ち前の忍耐強さを發揮して、それをやりとげられたので、父の身の上にもようやく春風が吹いてきたのである。それゆえ父が母を徳とされたことは非常なもので、「しづは内村の家に福を持ってきた」と、晩年に至るまで、繰返し感謝しておられた。（内村美代子著『晩年の父内村鑑三』教文館、1985年、86頁）。

神の愛と赦しに包まれつつも、「不遇」と窮乏と肉親からの非難は彼を「肉的身体」から遊離させる遠因となったことだろう。そして周縁を温かく包み、その処へ愛と癒しと救いを届けるイエスの言行は悲哀の鑑三を確かに掴まえたことだろう。しかも、創造主の言葉が出来事、事象と

なることを体験し続けたユダヤ人の歴史思想に通暁する鑑三には、ヨハネによる福音書1:4-5などは失意と悲哀の彼に希望と勇気を与えたことだろう。ヨハネによる福音書のその箇所は次のように記されている。「言^{ことば}のうちに命があった。命は人間を照らす光である。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」と。

イエスがこの世に誕生し、愛と救いに生き、マージナルな処に「愛と救いの光」をもたらした地上での働きの行くつく先は十字架の上であった。そしてそこで待っていたものは人間側の利欲にまみれた十字架上での処刑であった。それとともに、創造主から与えられた無私^{みづか}の愛と救いが横溢する復活であった。言葉が地上にイエス誕生と云う出来ごとを生じさせ、彼に地上の周縁に生きる喜びを知らせ、そこへ馳せ参じさせ、懸命に創造主のダイナミックな愛の働きを担いつづけることなのだと、この箇所は語る。

内村は自らに降り注がれた悲哀・痛苦に足元をすくわれそうになるとともに、その苦渋を通して創造主の人間に寄せる思いもよらぬ愛と導きに触れることができたことだろう。旧約聖書の民たちが用いるヘブル語の中に、ダーバール (dabār) という言葉がある。このダーバールは文字通り「言葉」を表す。それも意味を伝える言葉だけでなく、具体的にものごとや出来事を生き活きと生じさせるエネルギーを有す言葉なのである (R. W. Pazmiño, *GodOurTeacher* (Michigan: Baker Academic, 2001), 94.)。たとえば、創世記1:3に、創造主が言葉を発する記述がある。

神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

意味や伝達を行う人間の側の言葉でなく、出来事・事物を生じさせる神の側からもたらされる「コトバ」が記述されている。

静子と結婚後の鑑三の足取りは大阪、熊本、京都、名古屋と移り、流浪の日々が刻まれている。そんな辛酸の日々の中で、妻静子と創造主の側からもたらされる平安に浴することがあったことだろう。鑑三と静子はこの窮乏と流浪時代の1894年3月、ルツが与えられた。また、1897年11月には、後に精神科医として大成する祐之も与えられた。しかも、流浪のさなかの1896年9月は、窮乏生活に終わりを告げることとなる名古屋英和学校に就任し、さらに、ジャーナリスト、宗教者、思想家として大きく羽ばたく東京での生活の場が1897年1月から備えられていった。創造主と強く結びつくとともに、必至に支援する静子と「家庭形成」を行い、ルツ、祐之を育てる中で具体的に人格教育の大事さに気づかされていった。20世紀の幕開けは家庭形成の社会的意義とそこで育ちゆく子弟の教育に立ち向かわせる時がもたらされた。

三 健全な家庭形成と人格教育一終わりにかえて一

20世紀を迎えた1901年11月、長男祐之が4歳を迎えるときに書いた論説に「社会改良の最良策」というのがある。鑑三はその中で、家庭の成り立ちについてのべている。「人類が始めて地上に置かれし時に社会なるものは在らざりしなり、其時にホーム [家庭] ありたり、友誼的団合あり

たり」(『内村鑑三全集』9岩波書店, 1981年, 462頁)と綴り、家庭が国家、社会の原基、人格形成の基盤であることも説いている。さらに、彼が通曉するユダヤ思想が「家庭」を中心として形成されたものと確信した。つまり、家庭形成を真剣に思索する鑑三にとって、家庭は彼が生きる指針、魂の育みであるユダヤ・キリスト教から生み出されたものであることを知らされる度に、家庭形成は近代日本の行く末に大きな影響を与えるだけでなく、家庭形成や人格教育は神から求められる彼の大事な役割の一つだと自覚させられたことだろう。時代は少し下るが、1918年2月に発行された『聖書之研究』第二百十一号で、彼は再度、ユダヤ・キリスト教が深く「家庭教育、人格教育」に強い関心を払い続けたことを草している。「人類の家庭的生命は素とユダヤ人を以て始まったのである。世界何れの国に於ても家庭を中心とするの歴史をみない」(『内村鑑三全集』24岩波書店, 1982年, 68頁)と。

神に導かれつつ地上で使命を果たそうとする鑑三は「家庭形成」の意義とそこに育つ子どもたちの人格教育の重要性を考究し、そこで具体化される「家庭形成」と人格教育が子どもと家庭を包み込む国家社会にとって、また、子どもたちが担う明日の日本にとっていかに大事であるかを痛感させられていた。

鑑三は子どもたちとどのような関わりをもっていたのだろうか。祐之の妻美代子は4, 5歳ごろの祐之と鑑三との間に起こった「出来事」を伝えてくれる。美代子は鑑三が子どもたちに表す態度は「圧制的で雷のごとく、まさに幼児を委縮せしむるに足る」ものであったとそこで述べる。しかし、そうした厳格で、激しい態度で子どもたちに臨む鑑三が名古屋を去って東京で暮らすようになったある日、つまり、鑑三が『万朝報』に勤めていた頃のことである。美代子は厳格で、激しく接触する鑑三の内に、子どもと誠実に向き合い、子どもの人格、自律性、独立心、自発性などを尊ぼうとする真剣な姿があることを記している。

ある朝、「万朝報」社へ出勤の時、父は祐之に汽車のおもちゃを買ってきてやると約束された。それで祐之は一日中、父の帰りを待ちつづけ、夕方帰宅されると、真っ先に玄関にとび出して、「お父さん、汽車のおみやげは」と催促した。そして父から、「今日は忙しくて忘れてしまったよ」という返事を聞くなり、「お父さんのうそつき！」と大声で叫んだのである。父はぬぎかけていた靴をすぐまた穿いて、四谷まで、おもちゃを買いに行かれたということだ。(内村美代子著『晩年の父内村鑑三』, 108-9頁)。

誠実で、責任感を大事にし、相手が「弱小」であっても、それらと交わした約束は果たさなければならぬ。内村は幼子といえども、その存在を尊び、重んじようとした。師であるイエスと同様に、鑑三もまた小さな子どもたちを「無益な邪魔者」「不完全な端物」と見なさず、創造主からいのちを与えられ、才能を与えられたかけがえのない者と捉え、そして創造主から預けられたこれらの子どもたちを愛情と責任をもって育てあげなければならぬと自覚させられていた。しかも、それらの子どもたちが「血縁関係」を超えて、他の存在と共に今を生き、そこにある喜びや悲しみを共に分かち合い、一人びとを尊び合おうとする人物が育ちゆけば、この国に

「人の喜びを我が喜び」とし、「人の悲しみを我が悲しみ」とする無私の愛に満ちた「世界」が創出される。また、一つひとつのいのちを、人格を、認め、高めあう国家社会へと変えられてゆくはずだと展望していた。さらに、その具現化は戦いと蹂躪と搾取の世界をも変える平和をもたらす力となるはずだと予測していた。

そうした理想を掲げ、希望をもって地上の「改良」を展望する1912（明治45）年1月12日、窮乏と流浪の時代をもともに過ごした娘ルツが天へと召されていった。「家庭形成と人格教育」の推進に並々ならぬ関心と重要性を社会に訴える彼は人々との連帯と共に、創造主との結びつき、地上を去った者たちとの「絆、交換」の意義を知らされるのがこの出来事であった。それとともに創造主の摂理、永遠のいのちと誠実・真剣に向かわせられる時が「訪れた」と自覚させられた。彼は1912年2月発行の『聖書之研究』第百三十九号（聖書研究社）に「我等は四人である」との詩を掲載している。

我等は四人であつた、而して今尚ほ四人である、戸籍帳簿に一人の名は消え、四角の食台の一方は空しく、四部合奏の一部は欠けて、讃美の調子は乱されしと雖も、而かも我等は今尚ほ四人である。／我等は今尚ほ四人である、地の帳簿に一人の名は消えて、天の記録に一人の名は殖えた、三度の食事に空席は出来たが、残る三人はより親しく成つた、彼女は今は我等の裏に居る、一人は三人を縛る愛の絆となつた。（『聖書之研究』第百三十九号、50頁）。

地上での使命に生きようとする鑑三に、その使命をもたらす創造主とそこへと召されて行つたルツとの交換、絆を明瞭に知らされると、彼の「家庭形成、人格教育」推進の営為は天上の支援を受ける意義ある活動だと明確にされたことだろう。

こうした天上との結びつきをもって、「家庭形成」の社会的意義とその運営に労した人物は鑑三以外にもあった。「家庭改良」推進者として、社会から注目された羽仁もと子・吉一夫妻である。彼らは1906年3月、娘涼子を亡くした。それまで、彼等夫婦は健全なる社会を建設するためには健全なる家庭を形成することが必要であると痛感していた。そこには近代を迎えながらも、社会は次第に「財利の奴婢」と化していき、それも原因して「浮薄なる生活に陥」っていく人々が増加しだしたことに對し、「健全なる社会建設」が妨げられるのではないかとの憂いが、2人に生じた（拙論「羽仁もと子、吉一論」（『大正デモクラシー・天皇制・キリスト教』所収）新教出版社、2001年、220-2頁）。それ故、彼らは「健全」で、「品位」ある人々によって培われる「家庭」が少しでも多く輩出することを望み、そしてその「建設」は近代日本に「健全で、品位」ある社会を創出させ、国外から尊ばれる日本となっていくことだろうという展望があった。もと子と吉一は1903年4月、『家庭之友』創刊以来一貫して、「家庭、育児、庖厨、其他家庭一切の実務」（『家庭之友』第1巻第1号内外出版協会、1903年、巻頭）、すなわち、伝統や保守に縛られてきた家事に合理性、実用性、科学性を持ち込み、その領域を工夫・改良し、発展させることを目指し、さらにこの「家庭」をもって「健全で品位ある社会」、「知識欲旺盛で、使命に生きようとする人物の輩出」を図ろうとした。そしてその「建設」のためには、夫である吉一はもと子の支援者、

「影の存在」となって生きることも辞さない覚悟であった。

こうした「家庭形成」への取り組みは新しく明治30年代以降に台頭してきた都市新中間層からも支持された。そんな羽仁夫婦を注目する機運が生じだした矢先の1906年3月、彼らは涼子を天上へと送った。「家庭改良」を掲げ、「人格教育」の大切さを説く彼らが、雑誌『家庭之友』づくりの繁忙のなかで涼子を亡くした。悔いのみが襲ってくる出来事であった。そんな悲哀・痛苦の体験の中で、彼らに変化が訪れた。それは「何の為に働く乎」というもと子の言説のうちに表されている。

私共はわが終生の目的は天国を得ることであると信じ、今日も明日も唯その為に働くのであると思ふやうになつて以来、事に當つて危惧と不満の感情の著しく少なつて行くことを感じます。人と世間を相手であつた間には、或はわが骨折の世間の人に認めらるゝことの少いことや、自分の仕事の成功するかしないかといふことが、実に心に懸りました。(中略) [今は] わが善き事の認めらるゝか否かといふ心配でなく、果してわれによき事がなし得らるゝか否かとの心配です。／また私共は天国を得ることを、唯一の目的とするやうになつて以来、著しく世上の成功を羨む念慮が乏しくなりました。(『家庭の友』第4巻第9号内外出版協会、1906年、255-6頁)。

涼子の帰天はもと子・吉一夫妻に天上との結びつき、創造主の摂理などへ心を強く向けさせていったことがこの言説からも分かる。鑑三がルツの帰天を通して地上にある者たちの結束、さらに、天上へ戻った者との絆を強め、創造主の導きを深く知らされたように、もと子・吉一もまた、「神に喜ばれる働き」を懸命に行いたいと念じだしている。そこには、創造主に祈り、涼子と豊かに「交換」しようとする夫婦の信仰の姿がある。

涼子喪失と創造主との固い結びつきの中で地上を歩むもと子・吉一夫妻はさらに都市新中間層の中で、近代日本の力となり、指標となりうる子どもたちの育成に取り組んでいく。1914(大正3)年には『子供之友』を創刊し、翌年の1915年には『新少女』を発刊している。それらは子どもたちの知徳を涵養し、個性を尊重し、自律、独立、不屈、責任、進歩向上、自発性などの徳目を修得することを目指すものである。日露戦争後、都市には、産業の進展も原因して、「俸給生活者」が増加し、「童心讃美」がもてはやされ、彼らの取り組みに大きな関心を寄せる人々も多く表れてきた。しかも、時代を読み、それにあったアイデア提示する彼らは人気画家・漫画家の北沢楽天、竹久夢二を『子供之友』『新少女』の装画担当に起用している(瀬田貞二著『落穂ひろい』下巻福音館書店、1982年、253、289頁)。

もと子、吉一の雑誌作りは多くの都市新中間層の「家庭」から迎えられている。そうしたことを傍証するエピソードとして、彼らの娘である羽仁恵子は、幼い湯川秀樹もまた『子供之友』に親しんで育てられたことを『南沢だより』に書いている。

わたしが記憶するようになってから、母の机の上には、いつも「婦人之友」が置かれてい

た。母は、当時から羽仁もと子さんを尊敬していた。(中略) また「婦人之友」に親しんだ母が子供たちのために与えたものが、同じ羽仁もと子さんの編集した「子供之友」であった。この本はいつでも茶の間の母の机の上であって、兄弟たちはかわるがわる読んだものだ。(羽仁恵子著『南沢だより』婦人之友社、1990年、215頁)。

日本人最初のノーベル物理学賞受賞者、湯川秀樹が『子供之友』と親しんで育ったことが語られている。羽仁夫婦の提言実践は都市新中間層から信頼注目され、彼らの活動に関心を寄せる層が輩出し、彼らが提言実践する人格教育が広く都市中間層から受け入れられていることが分かる。しかし、このキリスト教を基盤にした家庭形成や人格教育は都市を超えて全国に速やかに浸透していったのだろうか。実利を求めることを第一義とし、競争に明け暮れ、「勝ち残ること」を執拗に言い続け、「立身出世」を奨励する近代日本の「成功路線」のなかで、誠実で、マージナルに心を寄せ、愛を表し、犠牲をも厭わず実直に日々を過ごす生き方、あり方は容認されるのだろうか。

人間はだれしも「よき人間となることを求め、日々、よく生きよう」と努める存在であることを否定できない。明治・大正・昭和をほぼ一人で旧制中学課程の研成義塾(1898年11月創立、長野県南安曇郡東穂高村矢原)を運営した教育者がいる。姓名は井口喜源治、キリスト教を基盤に教育を展開した内村鑑三の「盟友」である。井口の教え子、斉藤茂はキリスト教をもって教育を穂高で行う井口に対して、世間は彼を「変り者」と評し続けたことを著書『わが日わが道』後編(山上社、1967年、97頁)で述べている。彼は、「年中羽織袴(家紋付黒木綿羽織と小倉袴)」をつけ、「ヤソ教徒」であり、「禁酒禁煙」をモットーとして生きる姿に人々の眼には「変り者」と映ったと言う(斉藤茂著『わが日わが道』後編、97頁)。しかし、この「変り者」という世間からの評価に対して、教え子たちは井口の生き方、人格教育などについて真剣に考える機会をあたえられた。教え子等々力古吾郎も井口への追憶記の中で、これについて述べている。「世間一般はもちろん師を尊敬したが、一面「ヤソ」といい、かたくなな「変人」だと見たものも少なくはないと思う」と語り、また、望月積善は「基督教が「ヤソ」の名で世間から軽蔑され嘲笑され、非難され排斥された[時代]、井口先生が基督主義を堅持して、それによる人格教育に身を捧げ」た意義を問い続けている(斉藤茂・横内三直編『井口喜源治』井口喜源治記念館、1976年、151、161頁)。さらに、教え子堀内富貴人は井口の精神的基盤と「嘲笑と軽蔑」の中で研成義塾を維持・展開し続けた彼の信仰を深く探り、井口理解を深めようとしている。

先生は神に在って自由であり、平和の人であった。(中略) この野の教育者にそゝぐ世俗の眼の何とひやゝかなりしことか。しかし先生のともされた聖火は永遠にもえ、送り出された塾生の多くは、たとえ無名であってもその職に忠実であって、真実に生き、教養をもった凡人としてのたのもしき境涯にあるであろう。この名もなき偉大な教師は私の心に永く生きて行くのであろう。(斉藤茂・横内三直編『井口喜源治』、178-9頁)。

堀内たちは同窓生が自分がついた仕事を「忠実」に行い、「真実」をもって生き、しかも「凡人としての美しい境涯」を過ごす様子を知るたびに、井口の穂高での基督教教育の感化の大きさに思いを寄せた。井口の教え子は穂高をはじめとする長野県や東京、北米などへと渡り、「教養をもった凡人」として「人を愛し、神を敬って」暮らす者たちだった（拙著『闇を照らした人々』新教出版社、1992年、294-8頁）。そして先生井口への尊敬はいつまでも続いた。そうした教え子の中から、井口の教育活動を支援する者たちもいた。穂高で「足袋」を商う教え子は井口を支援して毎月10円を献げた。「電燈会社の集金人」となった教え子は井口の自宅の「電燈料」を代わって払い続けた。彼らは精神的、物質的な支援をしつつ、井口とともに生きることを求めている（斉藤茂・横内三直編『井口喜源治』、208頁）。

教え子斉藤茂は井口のこの教育活動とその「成果」を率直に綴っている。

義塾は（中略）英才を養う場所でない、偉人を育てる揺籃でもない。ただの凡人を作る修練場である。義塾に学んだ人で芸術家として名を知られる人もあり、記者操觚者として一家を成す人もあり、実業家として聞こえる人もあり、その他いろいろと世に顕れ出た人も数えることが出来よう。しかし、それらの人は最初から栄達を目指したのではなかったろう。おそらく凡人の道を求めて進みつつ、やがて洗練された自己の姿を其処に見出したのではあるまいか。（中略）各地に散らばっている義塾の門徒は悉く平凡な農夫であり、商人であり、職工である。それらは自己の労働に勤勉で、誠実で、そして文明人として決して耻かしからぬ教養を身につけた平凡人である。無名の戦士である。（斉藤茂著『わが日わが道』後編、95-6頁）。

斉藤は井口のキリスト者としての生き方、また、基督教をもって行う教育の感化力を的確に表している。さらに、彼は井口が研成義塾で生徒たちに語り続けた言葉をも伝えている。

井口先生の偉さは、その平凡に遊んで平凡に墮ちず、世間に泥^{なず}んで世間に没せず、常識に富んでまた常識を超えたところにあるのだ。先生が生徒を教えるのは難しい言葉でない。「よい人になれ」というのだ。（中略）単刀直入に「汝よい人となれ」と来る。これだけだ。（斉藤茂・横内三直編『井口喜源治』、211頁）。

「よい人になれ」と言って研成義塾を過酷な状況下でも維持・運営した井口のもとから巣立った教え子が「勤勉で、誠実で、教養を身につけ」て「平凡人」として生きつづけた。イエスの愛と救いの言葉に身を寄せ、自らも愛の人に少しでもなることを祈りつつ、地上を生き、また、イエスの生き方である「父なる神と人」をこよなく愛し、「周縁」に眼をそそいで、愛の手を差し伸べる姿に倣う井口の口から洩れる言葉は「よい人になれ」だった。

都市新中間層から注目され、迎え入れられる羽仁夫妻、また、人々の魂を打ち、支援者に囲まれる内村とは全く異なる事態のもとで教育活動を続けて、たどり着いた境地は「よい人になれ」「平

凡人でよいのではないか」であった。それはガリラヤの地で愛と癒しと救いの日々を過ごすイエスの「思念」と実践とに重なるものである。しかし、この境地は近代化を求め、栄達、立身出世を奨励する「指導者たち」と衝突するものである。しかし、井口は厳しさに苛まれてもイエスを掲げて愛に生きた。「喜源治さ」が穂高でよき評価を得だすのは井口の死後(1928年3月)である。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」(ヨハネによる福音書12:24)。

近代化していく近代日本の中でキリスト教を基盤にして「家庭形成」、「人格教育の推進」に取り組んだ人たちの軌跡をここに描き出した。その軌跡は新たな提言、斬新な試みであるが、近代日本中から快く迎え入れられるものではなかった。しかし、そこに描かれている歩み、実践、提言は現代のこの国に必要とされるものが色々と詰まっていることもみいだすことが出来る。

注

- 1) 「あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」(マタイによる福音書5:45)。
- 2) 「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失なった羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。」(ルカによる福音書15:1-6)。
- 3) 1885(明治18)年、内閣制度が発足し、初代文部大臣森有礼は国家主義体制の確立を求め、翌年1886年には、「小学校令」をはじめ、各学校種別ごとの学校令が公布された。これにより尋常小学校が義務教育の4年、高等小学校が4年になった。
- 4) 内村は1904年11月友人宮部金吾にあてて、母ヤソの葬儀の日の出来事を記した書簡を送っている。「小生は今度は又々奇態な経験を有りました、余りに愛せられざりし母を小生一人で看護し、終に一人で、植木屋と車夫との助を以て、一昨日雑司ヶ谷の墓地に葬りました、達三郎〔弟〕は今度母を死に至らしめしは重に小生の罪であると言ひ張りて、病中も死後も一銭の寄附をもなさず、一指の力をも貸さず、アマツサへ葬式の場にて小生が感慨を述べる時に小生に妨害と侮辱とを加へました、小生は老父を控へ、死体を守り、客人を待し、非常にもてはツラくありました」(『内村鑑三全集』37岩波書店、1983年、36頁)。